

平成 29 年度 第 6 回 南三陸町地域資源プラットフォーム設立準備委員会	
日時	平成 29 年 12 月 12 日 (火) 17:30~20:00
場所	南三陸町役場第 2 庁舎 2 階大会議室
次第	1 開会 2 会長挨拶 3 協議等 1) 前回までの議論振り返りと論点整理 2) 地域資源プラットフォームの事業・組織について 3) 基本計画提言書 (案) について 4 その他 事務連絡等 (次回日程、他) 5 閉会 <資料> ・地域資源プラットフォームの事業・組織について (案) ・参考資料 (ASC 牡蠣ブランド化事業、循環/シーズ研究提案) ・南三陸町地域資源プラットフォーム基本計画提言 (案)
出席	●委員 (敬称略) <出席: 14 名> 佐藤太一 (FSC/FM)、後藤清広 (ASC)、阿部寿一 (ASC/COC)、榎田豊久 (バイオマス産業/転換)、佐藤克哉 (バイオマス産業/循環)、工藤真弓 (山さございん)、阿部國博 (南三陸農業協同組合)、高橋長晴 (南三陸森林組合)、安藤仁美 (一般公募)、佐藤洋子 (一般公募)、最知明広 (行政/副町長)、及川明 (行政/農林水産課長)、佐藤宏明 (行政/商工観光課長)、佐藤和則 (行政/環境対策課長) <欠席: 4 名> 小野寺邦夫 (FSC/COC)、川廷昌弘 (FSC 普及)、阿部民子 (海さございん)、阿部富士夫 (宮城県漁業協同組合) ●事務局 <出席: 10 名> 企画課: 阿部課長、橋本震災復興企画調整監、山内地方創生・官民連携推進室長、阿部主査、松本主事 農林水産課: 及川係長 事務局補佐: 山内亮太、太齋彰浩、佐藤和幸、鈴木麻友 (株式会社 ESCCA)

## ＜ 1. 開会＞

## ＜ 2. 会長挨拶＞

会長：おばんでございます。第 6 回目の準備委員会でこれが最終回となった。今日、提言書の素案を固めて頂きまして町長に提出の運びとなるので、忌憚のないご意見を頂戴したい。

## ＜ 3. 協議等＞

事務局：協議に入らせて頂く。座長は会長の方でお願いします。

会長：では 1) これまでの議論の振り返りと論点整理について、事務局より説明を。

事務局：お晩でございます。字が小さくて申し訳ないが、前回の議事録を配布した。前回は、ネイチャーセンター復旧のお話と、みなさんと一緒に考えてきたプラットフォームのお話をどうするかを議論していただいた。

町としてはネイチャーセンターは公設公営で復旧させる方針となったので、それに地域資源プラットフォームをどう絡めていくかの話となった。阿部（富）委員より種苗生産など、漁業者に役に立つ話はどこで行うのかという問題提起も再三頂いており、それについても議論した。ネイチャーセンターの議論の後には、最終提言書の流れのみ、議論して頂いた。前回の積み残しということで、プラットフォームの事業計画、人員体制、資金計画については、今回新たに編めて議論して頂くこととなっている。

会長：前回までの振り返りで、あらためて確認したいことはあれば皆さんから頂戴したい。なかなか出てこないようだがよろしいですか？では次にうつります。

事務局：（本日の資料について説明後、）最初に事業計画案について、前回委員会のご意見を踏まえ若干修正した。事業計画の最初の 2 年間は ASC 牡蠣のブランド化を行い、その先に森里海循環や地域資源シーズの調査研究を行っていく書き方していたが、それでは遅いのではないかとのご意見があったので、シーズ調査やそのデータベース化を当初からやっていく計画とした。森里海の研究が進み、事業化につながりそうな課題が出てきたら、それを深掘りする形で実証試験へと進んでいくということを想定している。

人員体制については、当初からフルで人数をかけて始めるパターンで書いたが、

人件費などの現実的な問題から、当初は3名ではじめ拡充していく体制とした。資金計画については、行政の補助金を導入する場合、それが年度末に残って利益になるというのにはあり得ないので、収益事業の範囲で利益が残る計画に変更。組織については、一般社団よりも一般財団を最初から目指すべきとのご意見があったので、当初は一般社団で立ち上げ、その後は一般財団へと変更することも検討するという方針を提言書に記載した。

会長：関連するので一気に説明したが、今の説明に対してご意見はあるか？

委員：ちょっとシビアな言い方になるが、ASCを取得してから2年。ここから3年かけてブランド化に取り組む計画だが、漁業者として待てないということはないのか？もっと急いでくれという意見はないのか？

委員：2年目で徐々に広がりはでてきている。直接的な効果を現すのは難しいが、間接的には品質向上の動きが出てきたりしている。価格的にも下支えの効果は感じる。労働環境が変わり後継者が増えている。新卒も入った。来年ASC認証の更新期だが、漁業者も更新する雰囲気になっており、前向きに取り組んでいる。

宮城県漁協の別支所でもASCへの取り組みの動きがり、志津川や歌津支所にもやって欲しいと思っている。

会長：及川委員が言いたいのは、2年かけてブランド化を進めるが、養殖施設を減らした分もあるだろうから、漁業者が大丈夫なのか？（納得してるのか？）という部分だと思うが。

委員：それについては、心配をされたが、増やそうという声はない。生産性が上がったので、8時間労働が定着した。環境あつての漁業なので、後戻りの心配はない。

量を減らしたが、回転が良くなったので、一人当たりの生産効率は上がった。漁協全体の総生産量は7割に減ったが、漁業者も減っているので、1経営体あたりの生産額は増えている。

委員：他の海域でのASCの取得という話も浮上している。戸倉もASCの一つとして埋もれてしまわないか？

委員：この町はFSC認証も取得しており、他とは差別化できると思っている。FSCの桜のチップでASCの燻製をつくる企画もあった。非常に良い品質なので進

めたい。

委員：桜のチップはもう少しお待ちください。

会長：2年かけてのブランド化は遅くないか？もう少し前倒しできないかという意見だと思うが。

委員：オリンピックもありますし、前倒ししていただけるのであればありがたいが、遅すぎるということはない。

会長：他にありますか？組織については前回の宿題になっていましたが、そのあたりいかがか？

委員：資金の収集スピードを考えた結果、一般社団法人から入り、一般財団に移行するという案はそれはそれで良いと思う。

会長：すべてが実現できるとは限らないが、結果としてこの議論は提言書の形で出すことになる。それを踏まえ、議論して欲しい。

委員：人材育成の点で、資金計画のイメージをもう少し具体的に教えていただきたい。

事務局：1回2時間の授業を準備を含め実施するイメージ。

委員：町からの委託か？

事務局：基本的には町からの委託を考えている。

委員：環境対策課の分野で言えば色々な団体と協力して、なるべく費用をかけないで事業を実施している。

事務局：

生ゴミの収集率が上がるなど、町の各種課題と会話して色々作っていきませんかと思っています。

委員：

昨年度から 5 回、町と共同で環境教育始めている。ゴミの事業について教育というのは連携できそうな気がする。

委員：資金計画として成り立つかどうか心配。

環境分野としては今まで蓄積された知見を有効活用できないか、できるだけお金をかけずやる方法を考えていくのが基本的なやり方である。

委員：町民としては関わって行きたいという思いがあるので、繋がりが構築されるのは良いこと。

委員：お金をかけないで、とはどういうやり方か？

委員：今までは企業等の協力で進めていた。

委員：それは継続的にやれることか。

委員：それは体制にもよるので、色々考えていかなければならない。

事務局：住民に先生をして頂く際のサポートというのも一つの方法。

お金がないから続けないのではなく、必要性があればなんとかして続けるべきですが、そこをプラットフォームが担うかどうかは検討の余地があります。

委員：全体の事業費の中で、初年度の町の委託・補助が 9 割を占めるのは一般的にはありえない。

初年度から研究機能を立ち上げる計画だが、科研費などは見込めないのか？

事務局：以前ご説明差し上げたが、団体設立前の状況では申請すらできない。

委員：団体を作った上で研究を始めればいいのか？少しでも圧縮できるのではないのか？

事務局：研究の開始を後ろ倒しにするということか？

委員：漁業者に待てますか、という話をしたのは、研究があまりにも前に来過ぎて、実際のブランド化に時間がかかる（ことになりかねないのでは？）特になかなかできていないマーケティングの部分の先に進めてはどうか？そうすれ

ば最初の年の補助金額も圧縮できるのではないか。

事務局：前回の皆さんの議論を受けて修正したもので、事務局で勝手に考えたものはないことをお断りしておく。官民連携で立ち上げるプラットフォームについて、補助金を入れるのが必ずしも悪いことではないと思量するが。

委員：補助金を入れるのが悪いのではなく圧縮する努力は必要だと言うこと。もう一つは受益者負担の部分。負担金がずっと 100 万円で 4 年目でも 160 万円とは受益者の負担が少なすぎるのではないか？

事務局：受益者とは ASC ブランド化であれば漁業者という理解で良いか？

委員：漁業者であったり、漁協であったりということ。

事務局：その意味では確かにそこまで盛り込んでいない記載である。初年度から求めていく計画とすべきということか。

委員：4 年後にブランド化が成功した時の見込みを反映した計画にしておくべきなのは、60 万円しか上がっていないのはいかがなものかと思う。

委員：研究費に関しては、設備を整えるにも費用がかかるし、科研費も提案すれば取れるものではない。団体も必要だし実績も問われるのでいきなりは難しいと思う。確かに補助金の圧縮努力は必要だが、町として一緒に議論してきた中でここに力を入れるかどうか、舵取りしていただけるかどうかも鍵になる。教育の話もそうだが、この会議自体が町の公的なものとして議論させていたでいるはずである。

地域資源プラットフォームをしっかりと使うという姿勢が重要だと考える。FSC も庁舎で使っていたから南三陸が先進事例と言われるようになったし、供給体制も築けた。公的な立場である町に使ってもらうことの効果は大きい。今回のプラットフォームも積極的に町に使ってもらったり参画してもらえらるかどうかで進み方が変わると思う。

会長：資金計画については、今後財政担当、議会への説明含めて細かい部分まで詰めていく必要がある。今の段階でのご意見を伺いたい。

委員：私から言うのも何だがカキに偏っている印象もあるので、もっと里に絡

めた計画も入れてもらったらいいと思う。

会長：最終的に一次産業で頑張っている人が恩恵を受けるというのがこのプラットフォームの目的であるので、産業団体にもその使命を理解して頂く必要がある。

委員：JA の立場からすれば、農産物に関してはなかなか見えにくい面はあるが、もっと（予算を）出せという声は出てくると思う。FSC、ASC は国際認証なので、南三陸として外に出すときは一緒にした方が間違いなく効果が高い。農業分野でも全く取り組んでないわけではなく、プライベートブランドもあるが、それはそれとして、ある農家と話したときに丸平材木の FSC 材のおがくずと登米市の環境保全米の粃殻からできた堆肥で園芸作物を作ったら反響があったと言っていた。FSC の取り組みなどはもっとアピールしてほしい。南三陸町といえば海産物のイメージがある。農産物の商談にいても海産物が欲しいと言われてしまうほど。ASC 牡蠣のインパクトは大きい。プラットフォームとしてやっていくときにもっと行政の積極性が見えても良いと思う。町として本当に国際認証の価値を理解しているのか？と町外の方から言われる。南三陸はすごいね、よく言われるが、その意味でプラットフォームの事業はすごく良い事業だと思う。予算云々ではなくて、もっと行政の姿勢を示してほしい。

委員：プラットフォームは対話をする場として重要。燻製の話が出たが、実際にはなかなかみんなが集まる場がない。そういった場があればもっと進むと思うし、町としてもその動きを把握しやすくなると思う。

釜石に講演で呼ばれたが、向こうも山と海があり、南三陸はモデルになる地区とされ外の方が盛り上がっている。行政としてもっと胸を張っていいのではないかと思う。

ASC、FSC は専門性も高いので、民がやろうとしている動きに合わせて説明できるよう、もっと勉強も必要になると思う。そういう意味でも意思疎通の場としてプラットフォームは重要である。

委員：担当職員が認証についてスラスラ語れるくらいにならないとだめ。外からの期待の目がすごく強い。外に行くとよくわかる。

ASC が戸倉だけの取り組みではなく、町全体としてそれを広められるような取り組みにしていくというのは、戸倉の漁師さんに任せるのではなく、行政として取り組んで行くべきことだと思う。

委員：もちろん事業者が努力しなければいけない部分がありながらも、それが行政も一緒にやっていけるとなるとすごく強い取り組みとなる。

委員：だからプラットフォームが良い存在になると思う。

委員：担当部署の職員が話せるようにという点については、教本というかマニュアル作りを進めている。

委員：そのくらいでは足りないと思うが。

委員：専門性が高いので一般職員には難しい部分があるが、最低限の説明ができるようにしていく。

委員：逆に専門的な部分はプラットフォームが担うということだろう。

委員：そこを行政が深く突っ込むのは間違いだと思う。民でできることは民でやり、官が支えるところは支えれば良い。

委員：プラットフォーム官の代わりに知識を蓄えそれを外に発信する。

委員：それが役割だと思う。

委員：ASC を誰も知らないときに東京のセミナーに行ったら南三陸町の職員がいた。どこの行政もいないときにいた。持続可能な町に取り組むのはいち早くやっていた。ASC にいち早く取り組むことについて、いろんな支援はいただいた。環境と経済は別なイメージがあり、環境配慮は経済的にはマイナスというイメージがあったが、実際には環境を考えるようになってから経済がまわり始め、生活も豊かになってきた。環境と経済は両立するというのを南三陸から発信したい。そうでなければ1年2年でASC いらぬという声が出てたであろう。

会長：そういう意味では漁民の方の意識が変わってきたということ。  
他にありますか？

委員：前回の議論では、財団法人の方が信頼性があるのはもちろんのこと、町民の方にプラットフォームの設立をお知らせしたり、関わって頂くことで自分



たちのプラットフォームなんだと言うことを認識してもらおうという議論があったはず。そこに主体性もでるのではという議論があったかと思うが、そのために出資金を募るといようなことは考えられないのか。

事務局：社団でも基金を作ることはできるので、そうしたことは検討する

委員：クラウドファンディングのような出資よりもっと気軽な形でもいいので、あると違うと思う。

委員：どこまでして資金を求めるか。組織を維持するためにいわゆる資本金となるようなものに対し協力を頂くのか、あるいはファンドのようにある一つの事業に対して協力を求めるのか。

事務局：期間を決めて集めてみるということか。

委員：継続的に集めてもよいのでは？

委員：それがスタートラインの補助の圧縮の努力だと思う。

委員：スタートというか、2年3年4年後の経費の圧縮ではないか。

会長：私たちも説明責任があるので、成果が見えないといけない。何のために税金を使うのかが見える必要がある。町からの補助についても段階的に減って行って独り立ちできる計画でなければ理解されるのは難しい。

事務局：この資金計画自体は官と民で合意したわけではない。委員会の意見としてまとめたものという意味合いである。

その上で個人的な心配事を申し上げると、中長期的な資金源がまだははっきりと見えていない。継続的に続けるという視点が欠けているといえば欠けている。なので、先ほど及川委員が触れた産業団体からの資金を募る、というのはその打開策の一つになりうるのでは無いかと思う。

会長：プラットフォームが続いていくためには、継続的な資金が必要。そうなれば、恩恵を受けた人や産業団体からの出資は必要不可欠になるかと。そのためには成果を出してみせて行く必要がある。

事務局：ここで参考資料についてご説明する。

ASC のブランド化について。具体的にどうやって実現するのかを理解する足しになるかをつくったもの。成功の条件が何かを示しています。戸倉のカキは他の地域のカキと何が違うのかを示すために科学的な知見に基づいて研究を行う意義がある。それだけではなく、味としてどうなのかというあたりで、シェフにお墨付きをもらう。ターゲット、顧客、広報、営業、これらを揃えて初めてブランド化の入り口に立つ。COC 業者でないと扱えない問題もクリアできるのでは無いかと思っている。

実施体制は、東の食の会、松田先生、東北大学、JETRO など、チームとして外の組織と組み、プラットフォームがコーディネートすることで効果を上げられるのではと考えている。

事務局：JETRO については引き合いがある。繋がりを作れば可能性はある。

委員：何で燻製のカキが良いのかという点で言えば、日持ちして売れるという利点があり、町内外でいろんなところで売ってもらえる可能性がある。この売ったお金の一部がプラットフォームにも入るようなしくみになれば良いのかと思う。

事務局：もう 1 枚の参考資料に、シーズ研究の案を示した。

里の部分をもうちよっとやって欲しい、ということにも対応している。なぜ最初からやらなければならないかといえば、まず課題の整理と世の中の動きも整理してから取り組みを考える必要があるため。情報を整理して見える形で事業者提供して事業実施を考える足しにして頂く意味がある。そのために先んじてやる必要がある。

会長：はいありがとうございます。2つの参考資料についてご質問はありませんか？

委員：町内全山が管理できるような行政的な仕組み作りの提案までできるような研究を視野に入れていただきたい。林野庁から意欲ある自治体のみを面倒見るといふ方針が出ているので、放置林を管理できる体制を築いて行きたい。

委員：お金がどこから出るかというと森林環境税。

委員：私たちのような業者がお金を取りにくくなるので。

会長：はい、ここで5分休憩を入れます。50分に再開。

(休憩)

会長：はい、では3)基本計画提言書案について、事務局より説明を。

事務局：最後の基本計画提言書案ということで、今議論して頂いた内容も含めて、どういった内容とするか決めていく。

今日は方向性をご確認いただきたい。

最初に概要版として地域資源プラットフォームとは何かが分かるものを差し込んだ。これは別立てが良いか、ここに含めるのが良い課についても議論して頂きたい。前回提案したいのちめぐるまち推進協議会については、外出しとしていたものをやめたが、議論の場自体はプラットフォームで用意することとしている。

ネイチャーセンターとの関係は、図のように記載した。

会長：意見はありますか。

委員：ネイチャーセンターとの関係について、連携と書いてあるが、矢印が一方方向なので、両方向として欲しい。

会長：訂正とする。

委員：ネイチャーセンターはラムサールと磯焼けが仕事と書いてあるが、人材育成においても、内包しているという理解で良いか？

委員：いろんな場面で研究員の派遣要請が教育機関から来ると思っているが、担当課としては地域資源を広く知らしめる、という位置付けなので、人材育成とあって良いかどうかは疑問がある。研究員に手伝ってという話があれば連携になるかと思うが、そういう意味ではギチギチ決めない方が良いのでは。

委員：必要に応じて、という理解でよいか？

委員：はい。

会長：概要版を外出しした方が良いかどうかについては？

複数委員：概要版は外出しとしましょう。

委員：パンフのような分かりやすいものがよい。

委員：“海以外の領域の事業化「を」”ではなく「も」でないか。

会長：そうしましょう。はい、では中身について説明を。

事務局：(提言書案のページに沿い内容の説明)

巻末に参考資料として提案したものを入れるかどうか相談したい。

9 ページの図も概要版と同じものに変えるかどうかも検討して頂きたい。

複数委員：ブランド化事業(提案)、いのちめぐるまち循環/シーズ研究事業(提案)はイメージが湧きやすいので巻末につけたほうがよい。

9 ページの図は概要版の図に差し替える。

事務局：この後の内容は事業計画について(提言書案のページに沿い内容の説明)。18 ページが結びとなるが、ここで意識したのは、この事業が企業版ふるさと納税の寄付金を当てて実施しているので、寄付をいただいた企業さんにご説明できるよう意識した。

委員：10 ページで、いのちめぐるまち推進協議会は、プラットフォームの中に含まれているという理解で良いか？

事務局：はい。

委員：3 ページの図1で、“海山里”となっているが、“森里海”に統一してはどうか？

事務局：そのように訂正する。

会長：他にありませんか？構成とも含めこれで良いか？

事務局：今後の流れとしては、この提言書はこの場の皆さんの総意ということ

になるので、完成したら代表の方に町長へ提出していただくこととなる。  
細かい表現については、個別のメールでのやり取りとさせていただきたい。

1 週間以内にご意見があればいただき反映することにする。

提言書完成後の組織の立ち上げについては、あくまでも提言を元に動いていくが、微修正や変更等ができることがあろうかと思うがそこはご了承頂きたい。

委員：提言書は概要版も出すイメージか？

事務局：使い方としては、全部読むのがしんどいという方向けにという位置づけ。

複数委員：出した方が良い。

委員：概要版の記載で、カキの卸値が 2 割と 3 割で異なっているので、そろえた方が良い。卸値は品質によって、単価は上下するので一概に割アップとは言えないのでは？

事務局：その辺のリスクを排除するために、“認証されていない牡蠣と比べて” 2 割アップとした。

委員：“卸値” というよりは、“生産者の所得” とした方が良いのではないか？

事務局：当初はそうしていたが、“生産者の所得” とすると、その認証の影響だけでなく生産者の方のその他の努力によるものも含まれる可能性があるので、“単価” とした。

委員：共販はどのようにランク付けをするのか？

委員：基本的にはサイズが大きくてそろっているものが高い。小さいものは安い。

委員：実物を見て決めるということか？

委員：基本的にはそうである。

委員：牡蠣は小さいと安いのか。それは専門家でないとわからないと思う。

委員：その日に入荷した中で粒がそろっている一番大きい牡蠣が一番高い。味の評価ではない。見た目。

委員：売り方を検討していかないと ASC ブランドとして差別化ができないと思う。そこがプラットフォームの担う重要な役割。

委員：戸倉の牡蠣はもともと美味しいということで、以前は仙台のかき徳でも使われていた。

委員：ASC 自体は品質を保証するものではなく、市場では大きいものが高値で取引される。山田の 1 個 300 円のカキと戸倉の 70 円のカキを食べ比べたら、どちらが美味しいかがわかるのだが、なかなか市場価値に反映されないのが事実。

委員：ASC も FSC も認証だけではブランドにはならない。市場を作るために認証の広めることは必要だが、広まると希少価値は下がるので値段も下がる。なので、認証だけでは売り込めない。その時にどうやって付加価値をつけかを考えるのがプラットフォームの役割だと思っている。

委員：これまでは誰がどこでどのようにつくっているかは評価されなかった。今は環境にも配慮したやり方で次世代も安定してつくれるということが ASC 認証により保証される。認証に恥じないように品質も上げましょうという取り組みはしている。

委員：FSC だからいい材というのは違う。食品なのに味は評価されないのは驚きだ。木材で言えば FSC かどうかは関係なく良い木材は高値で売れる。おいしければ徐々に評価が上がるのではないか。

会長：通常のコマロや市場に出すやり方で付加価値が作れないのであれば、そのやり方ではダメだと言うこと。一つの指標になる。

委員：南三陸に関しては、良いもの、美味しいものを作った上で、それが認証を取っていますよ、ということを示すことで売れるのだと思う。発掘する場がプラットフォーム。いろんな方面で考えていった方が良い。

会長：

プラットフォームが責任を持って認知度を上げて行く必要がある。

それでは、提言書については、皆さんの意見で再度調整するということによろしいか。

委員：1 2 ページに地域への波及効果を示している。本日の議論で出た経済性の話も盛り込むべきと思っている。

会長：そうした観点で一つの提案としてご意見をいただければと思う。

事務局：今週中に訂正案を送付するので、来週中を目処にご意見を集約したい。

会長：ご意見や文言の修正についての提案は 2 2 日までとする。  
では 4) 事務連絡にはいる。

事務局：ありがとうございました。では 4) 事務連絡等ですが、2 2 日までにコメントをいただき、その後町長に提言書の提出となる。その際の委員代表の方をこの場で決めたい。提出の日程は 1 月 2 0 日付近になる見込み。

会長：前は、佐藤太一さん、佐藤克哉さん、佐藤洋子さん、工藤真弓さんをお願いした。今回も同様で良いか。

委員：海の代表として、後藤清広さんはいかが？

会長：はい、ではその 5 名の方、改めて日程をお知らせする。

事務局：これまでセミナーを 2 回実施したが、第 3 回目はオーガニック農業をテーマに、土壌の専門家をお呼びする予定なのでぜひご参加ください。日程は改めてお知らせする。

事務局（農林水産課）：2 月 4 日の午後、国際認証のシンポジウムがマチドマであるので、ぜひご参加を。1 月 2 4 日（土）には 1 0 時～1 6 時でラムサールのシンポジウムが開催される。

委員：2 月 1 7 日から 1 ヶ月間、マチドマにて FSC の写真展を行う。ぜひお越しを。

事務局：以上をもちまして、設立準備委員会を閉めたい。ありがとうございました。

**< 5. その他（事務連絡等（次回日程、他）） >**

特になし

**< 6. 閉会 >**

以 上